

N・ネフスキー「若水」についての伝承

博物館協議委員会 岡本恵昭

変若水（おちみず）のはなし

折口信夫による万葉集解説には「月読みの持ちたる変若水（おちみず）と云う語がある。いろいろな解釈で苦しんでみたが、結局、帰化人（中国）の月神信仰」に依る不老不死の水と考え、貴重なる水として持ち運んだと云う由来から、若水に対して、「おちみず」と呼び、その仮説に対してこれ以上の深みを求めなかった。

しかし折口氏は後日、宮古方言に「シジュン」「シデルー＝若返える」という言葉があることを知る。シジュン→スデル、シデル（シデルー）も日本の古語である。節の若水＝「節のしぢむ水」に共通した表言があることを知る。結局、方言やその他の古語が証明された一例であるが、これが「節のシデル水」、「スデル水」、「バカ水」と称され共通源を持っていることがわかったわけである。

ニコライ・ネフスキーさんは「方言の根拠の中に、はるか遠い宮古島の方言の不変性を受け継いでいないか。」その発見を以てこれまでの折口氏の説をひっくり返したのだから充分の驚きがある。従ってネフスキーは、宮古島の方言記録と体系的な辞典の作成に全力を尽くした。方言学者が持つ万国共通表記の音韻表記にて、まず、方言記録をノートに取った。最初に宮古島の車や木、岩の家の壁などから、日常用語まで聞き取りをしていたのである。まず、老婆の謡う「あやご」、「あーぐ」の歌詞である。ここに注目して「あーぐ」と呼ばれる「あやご」の表記に統一してノートにとめていた。「根間の主のあやご」などは、西原村の本村恵康さんや狩俣吉蔵さんの指導で書き出されたものである。勿論、狩俣村の根間の主を訪ねたり、根間の主の家にも出むいて、宝物である「剣」など、その他の宝物を見せてもらっている。その他に稲村賢敷の案内にて富村寛卓など、伊良部の郷土史研究家などにも指導を受けた。「石嶺のアコー木」などについては、伊良部村の国仲家からの聞き取りである。島尻勝太郎や下地馨は、N・ネフスキー氏の研究に接し、郷土史研究や方言「あやぐ」の詩集表記工夫など努力され、特に宮古島の方言辞典やノートについて関心を持ったものである。

N・ネフスキーは、宮古群島へ1921年と1922年に2回、26年と28年と3、4度と船便を利用し、採集の旅を続け、その船内で方言をノートにとめた。これには、上運天賢敷の引き合わせによるものである。

宮古島の狩俣、島尻、平良などを巡り、著名な聞き手を探がして「あやご」を研究したり、ノート作成を精力的に努力した。『宮古方言辞典』の編集を目標として、言語学の天才が立つ所、大いなる発見をする。

民俗学は柳田國夫や折口信夫から言語学的な指導を受けている。N・ネフスキーは主に伊良部村国仲の村長の話しや、妻のあやご、富村寛卓からは宮古の民謡の背景やその意味を聞き、カード作成に努力したという。天理大学図書館のネフスキー文書（文庫）には、宮古島での紀行文が書かれており、残されている。残念ながら、聞くところに依ると「ネフスキー・ノート」数冊は北海道の古本屋に買われていったと云い、その後、あちこちの大学や研究者の秘蔵になっている。辞典の原稿はロシアにある図書館に所蔵され『宮古島方言辞典』が解説され、刊行されるのに時と金がかかるのではないかと小生は心配している。

大正15年（昭和元年）民俗学研究関係で「あやごの研究＝原」、『民族』第1巻3号「あやごの研究」、『民族』第2巻1号「子供の遊技資料」、『民族』第2巻4号『宮古に美人が生まれぬ訳』、第2巻2号 論文「月と不死」N・ネフスキー、『民族』第3巻2号・4号のちに「東洋文庫」岩波におさめる。

以上の論文が著書『月と不死』におさめられている。

後日、ソ連に帰国してレニングラード大学と東洋語学専門学校にて日本語を教えた。その後、両見語、ツングース語の北満地方言語（西夏文字）の辞書作成に努力したといわれ、沖縄県宮古島の研究などの続投は出来なかった。特に「シツの若水」の話は、宮古島だけに伝承される神話の伝承である。神よりの使者の過まれる"罪"に依って起った死の起源神話である。1月6日のシツの日、早朝に若水を汲むこと、各家の人々が赤子より老人まで水浴びすること、若水が持つ不老不死の呪性がこもった"水"にまつわる話である。この伝承を始めて広め「死の起源」に関して論功をした人類学者がいた。大林太郎は自著『葬制の起源』（1926）角川新書の初版本をいただいた時、ネフスキーの若水の話をした。私は、若水汲みの井戸を"生まれガー"と云い、部落創成の始まりにある"水"の発見とその井戸が後に"生れ井戸"として村人に利用されていたことを伝えたと、今、思い出した。「若水」、「バッシ水」が生と死のサイクル回帰性が人間の生誕のウブ水と死者が身体を洗う逆水（後年になってから）の水も、同じ井戸水を用いなければならない約束があったことを知った。これが此の世の別れ水、バッシ（忘れ）水なのである。若水は正月にも用いられる最初の儀礼で、村の若水を汲む井戸（生れ井戸）より、タゴ（水を汲んで運ぶ桶）を担いで、ストゥムティチャーシ水汲みに早々に出向いた。若水は、家や家族、庭木や壁にもかけた。九年母は嘉利吉の木、庭に実をつけるフニズ木（九年母・ミカン的一种）にもかけて、力強く生れ出よ、実も総れ、枝もはい上る如く広がりを見せよということで庭に蒔いた。

若水の呪力性について

バカミズ（ワカミズ）というのは、始めて汲む新鮮なる水の事である。特に1月6日の正月（きのえうま）のあらび（始めの日）の早朝に生れ井戸（ンマリガー）、村に依って定められている井戸から聖水の如き清き水を汲みあげて水浴びをする。又、家族一同の飲み水にも用いる。仏壇に供えるアカ水、茶トウ（湯）の水として使用された。又、正月の若水汲みもこれと同じ風習をするという具合に若水汲みの行事は今日でも大事にされていた。若水の力は、人間の不死の願いと力を若返らす事である。又、若水は再生（スデル）、脱皮することでもであると信じられていた。永遠の生命（不老不死）が若水を浴びる事、身体へ入れる事で実現すると考える聖水であった。スデル（スジュン）Sujunと表記されている。

スデルには再生の他に、生命の甦がえりである、巢よりの脱皮の事で生命の再生産を意味する言葉でもある。蛇のスデ（再生）かえり、カニのスデかえり、生命がその母体より更に若々しく出現することを称しているという。この言葉が呪性をもって宮古島の生活の歌や古謡その他のあやごに謡われていることは注目にあたいする。死者の身体を洗う最初の逆水もこの若水を汲んで、生命の（魂）よみがえりを期待したということで、この若水の事を、バッシ（忘れ、別れ）水という観念に変化した。此の世とあの世との区別をする前に、清浄にする身体を洗う水が再生から離別へと変化したのと考える。

1926年8月17日、N・ネフスキーは宮古島における月の伝説を分析して、古代日本にあった月に関する信仰や儀礼伝承がほとんど消滅したことに関して、宮古島に今日まで伝えられている月の信仰、若水の話とその起源神話を発見して多くの学者を驚かせている。つまり、若水の話や"月さま"に関してのアガリヤニザカマの伝説は、かつて古代日本の信仰や観念の中にあつたと云うことである。これは又、「不死の起源」、「死の起源」にかかわる話としても共通するものがある。

シツ（節）の日は旧6月のきのえうまの日を云い、村落によって異なるが、シツマスの行事を行なう。世俵（ユータワラ）と呼ぶ丸い小石を拾い、ウラザ、トウウワ=台所か二番座の裏手の棚をかざる。一年に一回ずつ並べ置く。世が家に入ったしるしであろう。海岸のきれいな砂利石や砂を運んで来て、庭に蒔いて清浄に世を海の彼方から迎えると云うのである（池間村）。又、久貝・松原村の家々の人は、朝早くから海浜に出て、二枚貝を掘り集め、これをシナ貝といって、汁の具物に用い、食べ殻は門の石垣に置いておく。今でも門の左右にはシツのシナ貝の殻が置かれ、世俵（ユータワラ）のシンボルである貝の再生脱皮を家庭に持ち込むことを意味している。シナ汁は塩味で色を付けてはいけないと云う。それと共に、カー・フヌーと呼ばれる混ぜ御飯をにぎりめし（イズー）にして、家族の一人一人が食すると云うのである。この島では芋が主食であるので、ふかし芋を練ってにぎりめしのように丸い形にするイズが祭りの日に出されていた。カーフヌーも、その形でにぎられたであろうと思う。大きければ大きいほど、丸形のにぎりや芋煮に赤豆を入れたものを大世（ウプユー）と呼んでいる。

若水のはなし

変若水=若水=S i c iの日朝早く井戸から水を汲んで来て、家族中これを浴る習慣がある。そうすれば若くなると信じられている所から、此の水を若水と名づく。此の若水については次の如き伝説がある。「節の夜には人が蛇より先に若水を浴びていたから人は若返りしたが、蛇は若がえらずに居た。兎が或る年、人が蛇に負けて、若水を浴びても蛇は若返りし、人は若返らんようになったとき」(平良村の宮盛寛卓より聞き得た)。即ち極く昔は人間が死ぬと云う事はなかった。S i c iの夜に天から若水が落ちて人間が他の動物よりも先にこれを浴びていた。その水を浴びると古い皮膚が脱がれて、人が又若くなっていた。ところが或る年、蛇が人よりも先に若水の入浴をした。人間が来た時水が汚なくなっていた。それを見た人が入浴せずにただ手と足だけを洗った。その後は蛇が脱皮して若がえり、人間は若返らなくなった。ただ手足の爪ばかりが終始脱れて、生々しく居るとのことです。(筆者追加・多良間村、垣花春綱氏の話)。2説とも『月と不死』(岡正雄)にかかれたる若水の話と関連がある。

アガリヤ仁座がまの話

＝慶世村恒任からの聞き取り＝

是は昔々大昔、この大宮古、美しい宮古に始めて人間が住む様になった時の事だそうです。

お月様、お天道様が真上に輝いていて、美しい心の持ち主であったから、幾世変らじ人間の生まれつきの美しさを守り、長命(継命)の薬を与えようとお思いになって、節祭の日新夜(アラユ)にこの大地へ、下の島へアガリヤニザガマを御使としてお遣いになったそうです。アガリヤニザガマが何を持って降りて来たかという、二つの桶を重そうに担いで来たそうです。そしてその一つには変若水(おちみず)、今一つの方には死水(シニミズ)を入れて来ました。お月様、お天道様のお言付けには「人間に変若水を浴せて、世が幾度変わってもいつも生き替る事と長命を持たせよ。蛇には一肝心(きもごころ)を持っているものじゃないから、死水を浴せよ」という事です。けれども天から長い旅をして降りて来たアガリヤニザガマが非常に疲かれ、草臥れて脚を休ませんよと思って担いで来たその桶を道に下ろし小便をしていた処、そのすきに何処からともなく一匹の大蛇が現われて、まあ何と云う事でしょう。見れば人間に浴びせる変若水をジャブ、ジャブ浴びてしまっていたのであります。アガリヤニザガマの驚きはたとえようもありませんでした。「お

やおや、これはまあどうしたことでしょう。まさか、蛇の浴び残りの水を人間に浴びせるという訳には行かないでしょう。どうしたらいいんだろう。こうなったら仕方ないから、死水でも人間には浴びせる事にしようか」と思って泣き泣き人間に死水をあびせたそうです。アガリヤニザガマが非常に心配しながら、天へ昇り、上へ登って行って子細の事を申し上げると、お天道様は大変お怒りになって、「長命や生れ替りの美しさを守ろうと思っていたが、お前のために破られた。みんな私の心尽しが無駄になってしまった。お前の人間に対する罪は、いくら払っても払いきれない程のものであるから、人間のある限り、宮古の青々としている限り、その桶を担いで立ちただかって罪されている」とよ。人間はなんと馬鹿者であろうか。若し、蛇の様に気早いものであったら、変若水を浴びて生れ替って、いつもいつも長命でいられるものを、死水を浴びてしまったから死んでいかねばなりませんようになった。それに引き返えて蛇は。その時から毎年、Sicinu・ar o j uと呼ぶ節の祭日に向う夜、大空から若水を送ることになった。これより今日まで、第一日目の祭日のれいめいに、井戸より水を汲み、若水と呼び、家族一同が水浴びする習慣が存している。N・ネフスキーは、いくつかの例をあげ「月の斑点が餅や不死の薬のようなものを月の中でついている姿と見るのは『漢箒と共に支那から伝来したものであろう』か、然し、又、これ以前に日本に既に存在していた考えと或る程度まで一致していたので此処に繰り込まれたものであろう」と述べ、変若水の観念が日本古来からのものであることを証明している。

これに関して折口信夫は、その論文「若水の話」（全集二巻）の中で「日本人の細かい感情の呪いまで知った異人」ネフスキーから、細かいところまで注意をうながされた話があることを指摘されたと云っている。これはネフスキーが宮古島に蛇に関して「不死」の生命を持つことに注目して、いろいろと聞きまわって出てきた話である。

慶世村恒任『宮古史伝』にも「若水」の話は記述されていることは、こうしたネフスキーとの出会いからであろうか。

人間に不死を恵む月の慈悲も、人の悲劇となったが、それにもかかわらず、神は人を憐み永久の生命でなくとも、多少若返り位はさせて幾分でも粧飾せんとした。その時から毎年、Sicinu・ar o j uと呼ぶ、シチ（節目）の祭日に向う夜、大空から若水を送ることになった。これより今日まで、第一日目の祭日の梁明に、井戸より水を汲み若水と呼び全家族が水浴びする習慣が存している。これは引用が長く、説明がくどくなったが、シチの若水の起源を云うていること、慶世村恒任のネフスキー氏へ伝達する主旨である。不死とは、生涯永久に脱皮と再生をくりかえすことである。この一言に蛇の持つ生命力の強さを論じているが、蛇やカニの生命力は、又、島の信仰に対して捧まれる対象物である。瀬水御嶽の祭神由来記、狩侯の青スバの神、民衆、住人の発生誕は蛇始に依るものと信じられていることも注目される。

折口信夫の「若水の話」と宮古島の若水の伝承

折口には、旧萬葉集の語用・語索辞典がある。又全集にも広く「若水」に対してのとらえ方、つまり神仙思想がある。これは、著者一人の考えではない。当時はやりの中国道教文化思想や神仙思想の信念があった。信念というより観念であろうか、「変若水」（おちみず）にも、人を延命不老不死の聖水を持つものとして考えられていた。折口も「変若水」は（おちみず）とし、人を若返らせる呪力のある若水であると考えその伝説を山深い村に伝承される不老不死なる水の力をめぐっての話に関して、「変若水」を考えるにいたったわけである。

しかし、宮古島を旅行する事前に、東京で東恩納貴族や伊波普猷らから「若水」の方言や伝説について教えを受けていた。「シジュン」「シデル」この方言にネフスキーは関心を持って胸の中におさめ「方言特集」と云う野望はどこまでも宮古方言、一島の方言に焦点をしばっていく。

古代日本、平安か室町中世時代にいたるまでの本土のコトバ（言語）であり、方言原点・発声音韻の起源に似たものがある。三母音説などpの音のある地域の分布も、しかもまとまっていない、その他方法・原則的に南島固有の音韻発声があるという。こうした原理はあとで出てくるのであるがネフスキーのノートには、ローマ字・英語などで書かれている。変若水よりスディ水にN・ネフスキーも折口に反論をうながしたのも常に学問上でのことで、折口信夫もこれを認めざるを得なかった。月より落ちたる変若水がスディ水に古来から使用していたこと。スディ水が再生の水であり、生命の水・命の水として人間の不老不死の呪力を持った聖水であることを伝え発表した。

岡正雄は岡書院の刊行する「民族」第三巻二号、四号誌に「月と不死」の論文を発表した。1928年、昭和3年の頃に初版といっても、民族学会の下での発表で、日本の民俗学者や古代文字研究の専門家の祖座のもとでの初めて刊行された事例がある。このことは後日何らかの形で聞いたり、石田英一郎は天理大や大阪外語大でのネフスキーノートの抜刷やその他の一部を見る機会があって、月の語りぐさ・若水のことなど、中核になるものを後日整理し平風社より東洋文庫として出版した。

いろいろないきさつでネフスキーノートは大切なもので、特に宮古での方言研究に「辞典」という音声表記の訳韻されているノート類で多種にまたがって存在していたという。「変若水」がスデルを目的としたスデ水・シジュン・スディ水・いずれも「落ち水」が発信した方言が正当性を持つ再生信仰とか伝説・神話に関係していたことは理解されている。

ネフスキーがみたる月の斑点について

若水の話（アガリヤニザ）が失敗したスディ水の失敗は、アガリヤニザをこらしめるために天帝のなさしめる罪と罰の結末で、月様の方面に送り出したと云って、いわば突き飛ばしたように追い出して、生涯にわたって、月の中で米餅をつくウスとキネをかついでいる姿や、天びん棒をかついで、水桶を持って立たされている立ち姿・水、及び運び持つ姿に変えて、今日までみえる…。

「お月さまの中において桶を担いで立ちはだかった姿で立っていることを命日とされという。これも、アガリヤニザが死水を人間に浴びさせたことの怒りである。宮古の人間のあつ限り、宮古の青々とした草木があつ限り、アガリヤニザガマは神（天帝）の体罰を受けるのである。これが月の中に見える思い斑点の姿がアガリヤニザガマという話である。

「臼をつくンナツク棒を持った説話・水を運ぶ桶をかつぐアガリヤニザガマの姿」についてもネフスキーは漢籍より伝来した話以前に、「然しこれ以前に（日本）にすでに存在したと考えられる。日本古来の民の（説話）もある可能性を秘めている。」南島では、雨ガエル（カーフナタ）（フナタガマ）が月には住んでいて斑点をなしているという話もある。カエルやうさぎ・その他いろいろな動物の存在は世界的に分布した語りがある。

* * * * *

月（ツキス）tukisu という方言がある書にのっている。ツキガナス（加那志）など住民には何かしら身近なる存在であった。月様（トートーメー）などティダ（太陽）と反対に出入りする（移動）ツキ夜は夜室の大きな主人公である。ツキの意味の中に潮の満ち引きがあり、群星（ムリボシ）や夜中を見守るやわらかな慈悲のある光を放つ（月光）のである。人々や家々の運気を司る月が、宿命を予言し、「家々をピカラス」をする。ツキイスは歌や子供の遊びに登場する月加那志「月・日・太陽」などと家に関係ある「日取り・日より・月より」の使者としてのロマンのあるハート（心）のキューピットも暗さでなく、あわい淡交のまじわりなのである。童心より大人まで月加那志のあの斑点は、アガリヤニザガマの姿と考えられない「月にうさぎ」「うさぎの餅つき」メルヘンの世界は地球のすべての人々や民族に歌と民話をうたいのこす。こうした月に「若水」清浄な水だから蛇はよみがえり、人間は手足の爪をスデカエシテ満足する。実に不可思議の説話のひろがりが見える。

スティル（若返りの水）

人間は太古の不死の生き物（者）であった。不老不死の身体は、東洋思想に神仙信仰としてある。老いない、病のない、より若返りの歳を取らない人間の不死の希望は永遠である。巢（洞穴に籠もいてあの島尻のパーントプナハ（祭）にもンナフカ世乞いの夜、暗夜の室（むろ）を音出すことなく灯りなく夜明けをピャーシに出る（イ（居）ディル）行為は、ンナフカ世いの巢出る喜びである。暗夜からの解放は、月様の隠れる陰月の様に、くらくさびしい。「つく読みの・・・」月様も月の満月と欠けゆく暗夜に、古代人は月様の再生を待ちつづけ、十三夜の祭、十五夜の月影の夜を人々は恋いこがれていたのである。月の満ち欠けは、やはり若水の再生信仰と同時に発生したと想像する。太陽に人は願いを掛けないが、月加那志様には常に願って出来るものと信仰する。少女の月ものは、月の経だてたる現象として、月経を与えて女としての母性を証明する。アカブカ（月経）は月の定まりの期間と潮の引き満ちに密接に関係する。

月と若水の話は、人間のある限り京都へ追いあげてはいけないものである。若水信仰を共同体祭祀より、家中心の祭祀りになってくる。このように無限の広がりと言を有するものは「月と若水」若水と再生であろう。本論題のテーマからはずれてきたが一重にして「若水」の視点と用語はおさえたいものである。ネフスキーの筆跡は「月と不死」石田、岡正雄説、東学文庫、平凡社「民族」誌、岡書院、ニコライネフスキー「研究余滴」島尻勝太郎・球洋研究会第42号（1969年）・第112号（1970年）「ニコライネフスキーの足跡をたずねて」田中かな子「図書」岩波書店27号（1972年）が参考資料の一部にあるが、加藤九称の「天の蛇」ニコライネフスキーの生涯。「天の蛇（テインボウ）」の方言をめぐる論考も大切である。いずれにしても、天才的人物言語学者の説く民族学は、「西夏語の研究」ギリヤーク語など西城チベット周辺の言語調査に多大な資料を作成した。